特集2 働きながら学ぶ！ビジネススクール一期生

戦略経営リーダー目指す

中央大学大学院戦略経営研究科（ビジネススクール）が今年4月、後楽園キャンパスに開設されてから半年が経った。学ぶのは24歳から57歳の社会人で、平均年齢は36・3歳。「戦略」、「マーケティング」、「人的資源管理」、「ファイナンス」、「経営法務」を主な柱とし、戦略経営リーダーを目指す。2年間の修了要件を満たせば経営学修士号（MBA）が授与される。忙しい時間を割いて働きながら学ぶ一期生の3人に話を伺った。

ビジネススクール1期生

楠永太郎さん　53歳
くすのき・えいたろう

興味や関心に素直に生きる

楠さんは現在53歳。今までの職務経歴が非常におもしろい。20代で雑誌編集者、30代で金融機関に勤務、40代前半で事業再生に関わる仕事、そして40台後半からは外資系の法律事務所に勤務している。

「どれも、その年代に心惹かれた仕事に従事してきたといったところでしょうか。自分の関心や興味のあることに素直に従って生きてきたのだと思いますね」。職業をかえることはそう簡単にできるものではないはずなのに、楠さんは自然体で話している。

幅広い行動力のある楠さんが、様々な職業を経験した上で、新たに「ビジネススクール」での学修に挑戦している。その訳を聞いてみた。

仕事の最終コーナーを考える場

「自分は今、仕事の最終コーナーに入ってきているわけですが、『最後にどうまとめるか』、これを考える場としてビジネススクールを選んだのです」

約4ヶ月、ビジネススクールで講義を受け、また課題に取り組んでみて、「考える場」、「新たな知識を得る場」、「自分の人生を見つめる場」として、とても貴重な空間であることを実感しているという。異業種からの大学院生も多く、人脈も広がったようだ。

ビジネススクールを知ったのは、電車の広告だった。「『戦略を学ぶ』というキャッチフレーズに惹かれました」。1月の入学試験のために勉強し始めたのは、昨年12月から。短期間だったが、集中して勉強した成果を入試で発揮することができた。

現在、「戦略」を中核にして、組織の中での人の動きに関する「組織行動論」、人事に係る「人的資源管理」、また経営法務に関連する講義を受講している。

経験が役に立つ授業

「ビジネススクールでは『勉強』の捉え方が全く違いますね。学生の頃は受け身の授業でしたが、今は自分が勉強したいと思って受けているわけですから、自分に残るものが全然違うわけです」と強調する。授業形態も、先生の講義を聞くという

より、議論・ディスカッションをする方が多く、それがとても刺激になるという。授業の内容は、「7割は知らなかったこと、残りは知識・経験の確認です」という。

楠さんは、この2年間で研究論文（修士論文相当）を書くことも視野に入れている。「学ぶ、ということの延長という感じで、まだ最終的な意思決定をしているわけではないのですが、自分なりに学修の総括としてまとめてみたいと思っています。今は、知らないことを知ることが楽しい。少しでも知らないことを少なくし、一つ一つの物事の理解を深めていきたい」と語る言葉に力が入った。

増えた家族との会話

「45歳を過ぎてから考え方が少しずつ変わってきましたね。飲みに行ったりするのはもう卒業かな、と。仕事が生活の中心にあることは変わりありませんが、今では本を読んだり、音楽を聴いたり、旅をしたり、自分の人生のアレンジをもっと考えるようになりました」。ビジネススクールに通うようになってから、家族との会話はさらに増え、話題の幅が広がったという。

最後にこれからビジネススクールを目指す人へのメッセージをお願いした。

「How toを学びにビジネススクールにくるというよりは、普段考えないことを考える場、問題意識を持つ場として捉えるといいのではないでしょうか。先生とのコミュニケーションも取りやすいですし、勉強のための様々な環境も非常に整っています。仕事をしながら通うのは本当に大変ですが、自分のために勉強するわけですから真剣にもなりますし、やはり働きながら勉強することに大切な意味があると感じます。来年、さらにすばらしい仲間が増えることを期待しています」

（学生記者　橋本奈緒美＝大学院理工学研究科博士1年）

ビジネススクール1期生

旗持治二さん（はたもち・はるじ）55歳

銀行勤務後、今は第二の職場

講義はよく白熱するらしく、取材を約束した日も授業時間を15分程オーバーして講義は終了した。早足に現れた旗持さんは、緊張する記者に対し「若いね、何歳？　21歳か、うちの息子と同じだね」と気さくに話し始め、笑顔で取材に応じてくれた。

旗持さんは、中央大学経済学部国際経済学科を卒業して埼玉銀行に入行。30年務め、52歳で退職。その後、食品卸売最大手の国分の子会社である吉見国分株式会社に出向し、現在は、同社財務部兼経理業務部部長を務めながら、ビジネススクールに学ぶ55歳の学生である。

やりたい時とできる時が一致

「長い時間働いてきたわけですから、実践力はあると自負しています。しかし、実践力だけでなく、新しい理論が必要と考えました。自分自身を高めたいという気持ちもありました。やりたい時とできる時の一致した今が、いい機会だと」

旗持さんは、ビジネススクールで学ぼうと思った動機を、こう話す。三人の息子さんは、社会人と大学の4年生と1年生。子育ても一段落し、銀行からの退職金を妻と息子たちと相談した上で、ビジネススクールの学費に充てたという。

本質を理解し、実践に活かす

ビジネススクールは1年4学期制で、それぞれ2ヶ月間で、3、4科目を学んでいく。講義では先生と学生が活発に議論を交わすので、息が抜けない。講義終了後も夜遅くまでコモンズフリースペースのホワイトボードで議論している若い学生達もいる。

教室での授業だけではなく、大量の課題も出る。なかには数十ページにわたる英文の資料もある。

「授業は学部生のころの授業とは全く違いますね。学部のころは覚えることがほとんどだった思いますが、今の授業は覚えるものではありません。本質的なところを理解し、それを実践に活かす、応用する、という感じです」

勉強は帰宅後の深夜に

旗持さんは毎朝6時半には出社し、社内の二つの部門を行き来しているため、日中の勉強はとてもできない。そのため課題に取り組むのは帰宅後の深夜になってしまう。当然睡眠時間を削るしかない。どうしてこんなハードな日々をおくれるのか。

「金銭的なリターンは求めていません。自分の人生について本質をみる。いかに自分を深彫りしていくかなんです。新しい理論と実践を融合させ理解して消化する。この過程を経て得た知識をまわりへ還元していく。ビジネススクールは様々な知識を得て周囲に影響を与えていく、そのための消化剤なんです」

息子との会話も増える

こう強調する旗持さんが、ビジネススクールに通うようになってから、家族関係にも変化がみられるようになった。息子さんから「きょうはどんな授業なの？」とか「課題はちゃんとやった？」などと聞かれ、会話も増えたという。「家族にもよい影響を与えているのも確かだと思います」と笑う。

「授業についていくのがやっとです」というが、課題はやはり時間の確保だ。「勤務先が熊谷（埼玉県）なのでちょっと遠いのですが、新幹線で通えば意外と速い。なんとかして時間をつくります」ときっぱり言い切った。

（学生記者　小室靖明＝理工学部3年）

ビジネススクール1期生

石田政史さん（いしだ・まさし）53歳

座右の銘は「出たとこ勝負」

「私の座右の銘は『出たとこ勝負、川の流れのように』なんです」

ちょっと聞いただけでは、そんな無責任な―と思ってしまうが、石田政史さんは、「時代の流れに乗るということ。つまりその場、その場において、どのような行動をとるか、ということが大事だということです」と続けた。「経験から学んだことなんです」と聞けば、なるほどとうなずけた。

石田さんは親の代から続いている『石田樹脂工業株式会社』の社長である。経営責任を背負い、仕事に追われる毎日をおくっている。「経営のプロ」である石田さんが、なぜあらためて「戦略経営」を勉強することにしたのだろう。

社長として自ら志願

そもそもは、中央大学大学院南甲倶楽部寄附講座「経営革新」を聴講したことからはじまる。この講座は、大学院の講義として組まれたもので、一流企業の社長が経営について講義をする、というものである。石田さんは一般聴講者として2003年から4年間続けて聴講していた。もともと中央大学研究支援室の後輩との話の中で出てきたのがきっかけで、「とてもおもしろくて通い続けた」という。

講座を聴講しているとき、大学の同級生である人のご主人で、20年来のお付き合いのある大学の先輩からビジネススクールへの誘いを受けた。

「1期生では、母校愛の高い、人間力のある人を求めている。1期生は、目に見えない一生の宝となるプレミアムがつく。歴史の先頭に立てるわけで、自分たちで、白いキャンバスに絵が描け

る。中央大学ビジネススクールは、高い志と暖かいハートを持ったエグゼクティブを大歓迎する」

この言葉に乗った石田さんは、２００８年４月、ビジネススクール１期生としての生活をスタートさせたのである。

「ビジネスは5感が大事」

石田さんは、「ビジネスは五感（視・聴・嗅・味・触）が大事」と強調する。時代の流れを体で感じることが大事ということらしい。その五感は経験からくるもののようである。

「今までは勘、経験、度胸で乗り切ってきていましたが、今までとってきた行動を一度、学問的に見直してみれば、何か規則性が見えてくるかもしれない。数々の実践知・経験知について改めて、組織の中で働くということを改めて客観的に見直して、今までとってきた行動の検証をする場としてビジネススクールを位置づけています」

ところが、通うようになって半年余りが経過したいま、石田さんは、「ビジネススクールは少し合っていなかったかもしれない」と思い始めている。20年近くも中小企業の社長として経営に関わってきている石田さんにとっては、「中央大学ビジネススクールが養成する戦略経営リーダーとは」というビジネススクールが目指す方向とかみ合っていないことに気付いたからだ。

「人脈」という貴重な財産得る

だが、石田さんは、「もっともっと大事な財産として得られたものがあります」と力を込めた。それは「いろいろな企業で働く人々との年齢差を超えたネットワーク」だ。

「製造委託されている下請事業者の取引は、親事業者からの注文がすべてなんです。注文がなければ会社は成り立たない。注文というのはまさに人脈です。それに、従業員も、こちらが選ぶのではなくて、従業員にこの会社を選んでもらう、という感覚なんです。つまり人脈です」

「人に出会うことが大事」と考えている石田さんは、ビジネススクールでの人脈づくりに努めている。「この7月初めて1期生の親睦会があったんですよ。1次会から3次会まで、トータルで7時間にも及んで大盛況でした」と笑う。

会の終了時には午前3時をまわっていたという懇親会で、石田さんは通算90人の人と名刺を交換したという。「お金に換え難い財産です」と顔をほころばせる。

マンション借り、徹夜で勉強も

それにしても社長業のかたわら大学院の勉強を両立させるには、かなりの負担と覚悟がいるにちがいない。石田さんは、自宅近くのマンションに1室を借りている。ビジネススクールの入学が決って、「勉強する部屋を考えたら」との奥さんからの提案のようだ。

石田さんは前期、木・土・日と週3日授業をとっている。「課題をこなすのはたいていマンションの部屋ですね。土・日の授業の直前である金曜日は徹夜になることがほとんどです」というのだから、生半可な気持ちでは到底続けられない。

「でも僕がこうして大学に通うことができているのは、従業員のお陰。社員の理解があるからなんです」。周りの人に助けられながら仕事と勉強を両立させている石田さん。「ビジネススクールに来て得られたのは、質の高い講義はもちろんのこと、年齢や職種を越えた同期生達とのネットワークです」と語り、周囲の人への感謝のしるしとして、築いた人脈を今後の仕事に生かしていく考えだ。

（学生記者　橋本奈緒美＝大学院理工学研究科博士1年）